

金森幸介は2009年5月に5枚組CD-R『50+1』を発表した。わたしはこれを『original 50+1』と呼ぶことにしている。

『original 50+1』は同年4月25日と26日、東京・下北沢でのライブを完全収録したもので、金森幸介は2日間で51曲をうたった。当初、この企画は2001年に彼が発表したCD5枚組アルバム『50/50』（全50曲収録）を再現し、ボーナス・トラック1曲を追加したライブ・アルバムを制作するために発案したものだ。しかし金森幸介自身の考えもあり、01年以降に発表した新曲、『50/50』から洩れてしまった作品などで2日間のライブ・レコーディング、つまり『original 50+1』を構成することとなった。それでタイトルも、「ライブ50/50」から「50+1」と変更したのだった。

4月25日は朝から土砂降りの雨だった。わたしたちはリハーサル後、本番までの間、会場近くの喫茶店でポーッと“傘の波い〜”を眺めていた。

「大阪でも『50+1』をやろう」  
そのとき、わたしが切り出した。金森幸介は間髪を入れず「アホかあ〜！」と返したが、「大阪のミュージシャンが大阪でライブ・レコーディングしないでどうする」とわたしは通り一辺倒の理屈をいった。

金森幸介のライブ・レコーディングス・シリーズをはじめから1年。13タイトル（12公演）を数えるまでに至っているが、大阪での収録はヒポボタマス（08年2月24日）と光玄とのライブだったHeaven's Door（08年4月9日）のものだけであった。70年代から金森幸介を知る京都の老舗ライブ・ハウスのオーナーはHoy-Hoy Recordsのカatalogを見て「幸介は東京へ移ったの？」といった。そのことにわたしが悔しさを感じるほど（金森幸介と同じように）大阪という街に思い入れがあるわけではない。ただわたしが金森幸介と知り合ったのは大阪だったし、そのころの彼がうたっていた光景をはっきりと記憶している。当時、わたしはまだ10代で、金森幸介は20代だった。そのことを懐かしむ気持ちがわたしのなかであったのかもしれないが…。

『original 50+1』のライブがはじまる前に、次の「50+1」を、と口にしたわたしであったが、その考えは彼が51曲を目指してうたい進んでいくうちにさらに強固なものへと変化していった。それほど『original 50+1』のライブはすばらしいもので、集中力、声、体力配分など、どれをとっても最高のバランスが保たれていた。

「おれはいつも一緒や。変わる時代に変わらぬ男」  
金森幸介はよくそう話している。「イチローと同じ、ルーティン・ワークを大切にす」ともいう。しかしイチローでもいつも同じわけではない。プレイする環境や体調、対戦相手や球種（ライブでいうと観客か？）、木製のバット（ギター）は天候によっても変化することもある。ただ彼らは、当然のことではあるが「同じように」プレイすることを心がけている。それでも『original 50+1』のときの金森幸介は明らかに違った。会場側からは（通常はないはずの）時間的制限もあり、ほどよい緊張感が金森幸介にはあった。その緊

張感が2日間も継続していたことが、『original 50+1』の素晴らしさであり、金森幸介が〈日本一のポップス・シンガー〉である所以である。

本作『50+1 again』は9月26日と27日に大阪・玉造のさんくすホールで開催された。大阪は東京とくらべ気温が高く、日中は少し汗ばむ陽気であった。

さんくすホールは近年、年末に開かれる金森幸介と有山じゅんじ、中川イサトのトリオでのライブが恒例となっているところ。そんな場所で『original 50+1』のときは明らかに異なる金森幸介がいた。ホールの方々のもてなしもあったし、長年の付き合いである音響の村尾泉への信頼もあったからだろう。金森幸介は会場入りするとまずコーヒーを飲み談笑することからはじめた。たいていの場合、彼はそのようにしているのかもしれないが、わたしにはその談笑時間がいつもより長く感じられた。そしてリハーサル…もっとも違っていたのはこのときだろう。いつもの彼はその日に演奏しない曲をリハーサルで演奏する。近年、そのすべてはカヴァー曲だ。しかし今回のリハーサルでは「この美しい朝に」や「退屈ですネ」を演奏した。ふだん、うたわない曲を入念にチェックしていたのだろうか？  
金森幸介が「この美しい朝に」を選んだのには少し驚いた。昨年11月、東京でのライブの際に「あの歌はもううたいたくない」と話していたから。わたしにはなんとなくその理由がわかるような気がしたので彼にはなにも聞かなかった。それを突然、リハーサルからうたいはじめたので意表をつかれてしまった。

『original 50+1』やHoy-Hoy Recordsから発売されている彼のライブ・シリーズと比較してみると、『50+1 again』での金森幸介はよく喋っている。「地元大阪だからリラックスしている」という受け取り方もできるのだろうが、もしかすると彼独自のペース配分、「お喋りと見せかけた休憩」だったのかもしれない。

もともと彼はよく喋るタイプのミュージシャンで、わたしの記憶のなかではうたっているときよりも（ライブ中に）喋っている時間のほうが長かったものもあるほど。しかし彼は突然、話さなくなった…そして今日、少しずつではあるがまた「喋る」ミュージシャンへと戻りつつある。今回、彼の「喋る」部分にトラック・ナンバーを入れたのはそのことを強調したかったから。その部分だけを聞いていただければ、本稿のようなものは、ほとんど不必要なものとなる。金森幸介の友人でもある有山じゅんじは「幸介はもっと喋ったらええのに。面白いねんから」とよくいっている。

『50+1 again』のライブ会場はとてもなごやかな雰囲気にも包まれていた。金森幸介本人にはうたい慣れないものも多く、（歌詞カードを見ない彼にとっては）それなりの緊張感があったようだが。

『50+1 again』のライブでは観客にドーナッツを配った。そのアイデアは金森幸介の好物であることと彼が好きなニール・ヤング、グレイトフル・デッドに由来している。金森幸介のレパートリーのひとつ「Greensleeves」はサンフランシスコにあるフィルモア・

オーディトリウムが公演終了後に流していた曲で、今はニール・ヤングがそれを受け継いでいる。グレイトフル・デッドはその会場で頻りにコンサートを行っていた。おそらく彼はその影響で「Greensleeves」をレパートリーに取り入れたのだとわたしは思っている。そのフィルモアでは観客にリンゴを配っている。それは1960年代からつづいていることで、リンゴと花を差し出した女性客がコンサート・チケットと交換してほしい懇願したことからはじまった。ドーナッツを配ったのはリンゴと置き換えただけのことである。

カヴァー曲についても触れておかなければいけないのだが、ほとんどの曲の説明を彼はライブ中に話している。それに彼が通常のライブでもよく取り上げているものばかりである。1曲だけ、金森幸介がリハーサルでだけ演奏する曲がある。ビーチ・ボーイズの「Surfer Girl」だ。

「おれの周りでビーチ・ボーイズが好きやったんはおれだけ」  
彼はよくそう話している。わたしの記憶のなかでも大阪という街とビーチ・ボーイズの音楽が一致したことはない。あの街ではビーチ・ボーイズが編み出した独自の歌声（コーラス・ワーク）よりも彼らよりひと世代後のイーグルスやドゥービーズのものが多かったような気がする（彼らはビーチ・ボーイズと同世代のモダン・フォーク・カルテットが生み出したコーラスに強く影響を受けている）。金森幸介のSurfer Girlはかなりゆったりとしたテンポで、つづく「週末」のほうがスピード感を持っているように聞こえる。わたしはこのメドレーを『50+1 again』が開かれる1か月前、犬山市の「ふう」でのライブではじめて聞いた。金森幸介は「夏には夏の歌を」と自身のレパートリーのなかから夏をイメージさせる曲を探していたという。といっても、彼の作風はほとんどが「サマー・オブ・ラヴ」をテーマとしたものなので、乱暴な言い方をすればすべてが「夏の歌」なのだ。

『50+1 again』のライブは何事もなく順調に進み、終わった。問題視されるころはなにもなかった（と思う）。金森幸介も歌詞を間違えることはなかったし、わたしは観客にドーナッツを配ることができた。51曲中、『original 50+1』を重なった曲はわずか19曲。そのうち「Help Me」は今回3拍子でうったし、「ちがう言葉」はイントロがあった。めでたし、めでたし…であるが、最後に2009年4月に行われたライブをなぜ『original 50+1』と呼ぶことにしたのか？については、金森幸介にはまだまだたくさんの歌が、記録されなければいけない歌が残っているからである…とだけ記しておく。

2009年10月 北村和哉